

# ② いま宿場がおもしろい

齊藤恒樹

一——昔、保土ヶ谷は中心地だった

昔も今も旅には出会いと別れがある。様々な人生のドラマが旅で展開される。江戸時代には、街道や宿場が整備され、旅をする人は多数いたといわれる。

宿場における人間模様を描いた小説に、島崎藤村の「夜明け前」がある。また、この小説には次のようなくだりがある。「翌日は寛斎と牡丹屋の亭主とが先に立って…、横浜道へ向かった。番所のあるところから、野毛山の下へ出るには、内浦に沿うて岸を一廻りせねばならぬ。程ヶ谷からの道がそこへ続いて来ている。」

当時の宿場は、このような人の往来とともに、江戸、上方の文化や産物が近隣農村へ伝播していくセンターであった。

しかし明治以降、宿場は鉄道や幹線道路の整備により、交通・通信の要所として果たしてきた役割を終えた。現在の保土ヶ谷は、戦災・道

路の拡張などにより、新しい商店街と住宅街へと変化し、昔の姿をしのばせてくれる町並みはほとんど残っていない。

二——宿場の話はホット&ガヤガヤ

東海道保土ヶ谷宿という歴史性をまちづくりに生かすため、保土ヶ谷区では一九八五年にワークショップが行われ、その成果は区の事業に活用されてきている。

このワークショップに参加した区の職員が中心となって、区民の有志とともに一九八六年七月に東海道具楽部という歴史研究会をつくり、翌年六月、その研究成果を「保土ヶ谷宿とまちづくり」という冊子にまとめた。

そして、その研究成果を発表するため、七月十日にミニ・シンポジウムを行った。この発表会は、朝日新聞で紹介していただき、多くの人達の参加をえた。しかも、このとき行ったア

- 一——昔、保土ヶ谷は中心地だった
- 二——宿場の話はホット&ガヤガヤ
- 三——元治元年の都市的町並み
- 四——宿場をキーにしたまちおこし
- 五——未来につながる宿場おこし

ンケート調査に、これから勉強会に参加したいという人が二八人もいたのである。保土ヶ谷の歴史をまちづくりに生かしたい、という思いを持った人が多いことに驚かされたが、会の活動は、こうして住民主体の活動へと変化していった。

その後何回かの打ち合わせを経て、八月二十四日に発足式を行い、研究テーマや会の名称について話し合った。特に会の名称については、あらかじめたたき台として名称を三つ用意し、会場からも案を出してもらい、ネーミング・ワークショップという楽しい雰囲気の中で議論が行われた。

このとき、全部で九つほど出された名称の中から、二つに絞って決戦投票を行った。ひとつは「保土ヶ谷四百倶楽部」で、もうひとつは「HOT<sup>2</sup>がやがや四百」である。前者は保土ヶ谷宿が公認宿になった一六〇一年から数えて、二〇〇一年に四〇〇周年を迎えるということだ

四百を使っている。また、後者は「ほどがや」をもじって、HOTに濁点をつけることで「ほど」と読ませるのである。どちらも多くの会員に支持され、前者を会の名称に、後者をイベントの時に使おうということになった。前者についてはその後修正意見が出て、程ヶ谷でどうか、宿を入れた方がよいか、みんなで熱心に討議を重ね、「保土ヶ谷宿四百俱樂部」（今後は「四百俱樂部」とよぶ）が会の名称として採用された。後者は現在会報の名称に使っている。

この会の方針は、気軽に楽しくやりながら、歴史の流れの中で蓄積し、今日まで伝えられている埋もれた遺産を掘り起こし、保土ヶ谷の今後のまちおこし—ほどがやらしさづくり—と活性化を進めていこうということである。

### 三——元治元年の都市的町並み

町並みは地域の文化を表現する貴重な手段である。そこでまず、東海道倶楽部の活動で探りだした保土ヶ谷宿の特徴と、その復元作業についてみてみたい。

#### ①—町並みの復元

町並みの復元模型は、最近各地の博物館で数多く再現されている。町並み復元模型のスケー

ルは千住宿の足立博物館では五〇分の一で、三〇〇メートルにわたる街道を再現している。川崎市民ミュージアムでは一〇〇分の一で作成中であり、平塚市や府中市の博物館は二〇〇分の

表一-1 保土ヶ谷宿の人口の推移

年号	人口(人)	家の数(軒)
1609(慶長14)年	1,200~1,300	250~260
1717(享保2)年	1,625	325
1803(享和3)年	2,022	453
1858(安政5)年	3,352	670

「保土ヶ谷郷土史」より

一、江東区の深川江戸資料館の長屋や旅館は原寸大で再現されている。また国立民族学博物館では、原寸大にしないときでも、少なくとも、一〇分の一で模型を作っているという。

そこで、保土ヶ谷の都市形成のルーツ、宿場の町並みについて、保土ヶ谷郷土史にある元治元年(一八六四年)の町並み絵図や公図(昭和七年、および現代)を用いて、保土ヶ谷宿がどんな町であったか検討を加えてみた。

宿場町は自然発生的な町でなく、幕府によって計画的に作られた街道に沿って、細長くのびた集落を形成していた。江戸末期になると交通量の増大に伴い旅館、茶屋、商店の数は急増した。この頃には、宿場は周囲の農村部と違う町

図一-1 川崎宿の地割図



並みを形成していたと推測しうる。

宿場の地割図の特徴は、街道をはさんで間口が狭く奥行きが長い形、短冊型である。川崎宿(図一-1)がそうであり、品川宿や安中宿、奈良井宿も同様である。

そこで、保土ヶ谷宿のあった保土ヶ谷町、帷子町の公図(昭和七年和紙に作図)をみると、短

冊型が読み取れる。現代の公図にも、天王町駅周辺を除いて、この特徴がかなり残っている。

このように、今でも短冊型が残っていることから、地割図を都市の遺伝子とみることができる。

平面の配置の復元にあたり、現在でも昔の場所が知られている本陣、脇本陣、茶屋本陣をキーにして、一つ一つ町並み絵図の家々を公図にのせていった。元治元年の町並み絵図は、将軍上洛時に一、〇〇〇人も人間が移動するため、宿泊施設の現況調査をしたものである。これには、各々の家の間口と奥行きと部屋の広さが記録されている。部分的には分筆等のため、不整合のところもあったが、おおよその配置は確定し、高札場、問屋場、助郷会所の位置についての確認ができた。

幕府によって人工的に作られた宿場の特徴として、本陣から街道が「く」の字に屈折している。これは城下町の道が軍事的理由で屈折しているのと同じ理由であろう。また、本陣を中心として旅館や店が連担していて、近隣の村落と違う都市的景観が形成されていたとかかえり。当時の街道の連続立面図再現は、今後の課題である。

## ②—宿内の家の状況

保土ヶ谷宿の街道の幅員は五間(九メートル)

である。この五間の道をはさんだ家々の内容を記しているのが保土ヶ谷宿往還町並絵図である。これには間口、奥行き、座敷の広さ、板座敷の広さ、総坪数、総畳数、屋号、名前がしるされている。近隣の村の家のつくりは、名主の家を除いてすべて粗末な家で畳部屋がなかったのに対して、宿内には大きい家が連続していた。格式の高い門と玄関を配置した、瓦屋根の広い屋敷の本陣を中心として、脇本陣、二階格子の旅館、草葺屋根の店が並んでいたのである。

本陣の建坪の広さは二七〇坪、脇本陣大金子屋は、七五坪という大変大きい屋敷で、現代でも立派な屋敷である。

宿内の家々は朱書きで上・中・下という分け方がしてある。おおむね広い家が上というランクとみることもできる。しかし、例えば間口五間、奥行き一〇間以上のタイプをみると、上は七軒、中は二軒、下は二軒ある。同じ程度の屋敷の広さで三つのタイプが共存している。

これについて、川崎市民ミュージアム準備室の三輪主査のアドバイスによると、おおむね家のつくりの格で分けていたと思われる。例えば、上は瓦屋根、中は板葺、下は草葺という風に推測しようとのことである。

間口と奥行きの各々の長さの分布状況は、表1-2のとおりである。地割図の間口が五〜六間

表-2 間口、奥行きの分布

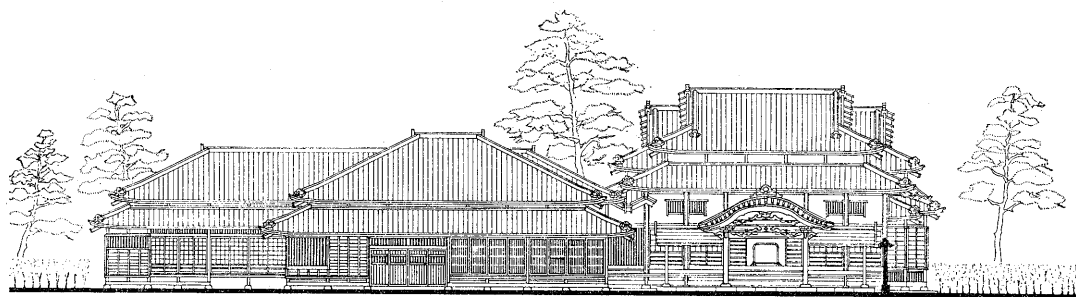
間口(間) \ 奥行(間)	3	4	5	6~9	10~	計
3	11	7	2	2		22
4	19	15	9	2		45
5	9	21	14	3		47
6	10	20	10	3	1	44
7~9	12	10	31	10	1	64
10~	2	5	11	9		27
計	63	78	77	29	2	249

タイプが多いため、建物の間口は三間から五間が八八%を占めている。奥行きは四間から一〇間まで変化に富んでいる。奥行きが長い地割のため、街道に面した家の奥は、畑もあるが、家も建っている。これは東海道分間延絵図によって知ることができる。

## ③—本陣の復元

本陣の名称は、武士は常にくさの心構えをもって宿泊するところから、つけられたものと思われる。保土ヶ谷宿の象徴的な建物であるこの本陣のことを語らずして、保土ヶ谷宿を語る

図一 2 本陣の想像復元図（北立面図）



ことはできない。

大名は三〇〇人から五〇〇人の大移動で、調理器具、生活用品をすべて用意し、料理人まで連れていた。つまり本陣は泊まる場所を提供することを、主な役目としていたわけである。

本陣の建築について大熊喜邦氏は「東海道宿駅と其の本陣研究」（日本資料刊行会）のなかで基本型、広場型、後退型、大土間型、遮蔽型の五つのタイプに分類している。ところが、保土ヶ谷宿の本陣は、どのタイプにも該当していないとのことである。

本陣の建物は浮世絵、江戸名所図会に描かれているが、品川、川崎、神奈川、戸塚と比べてみると、想像復元された保土ヶ谷本陣（浮世絵や名所図会になぜかまったく描かれていない）の玄関には唐破風の屋根があり、特に豪華な仕上げが施されていたようである。

保土ヶ谷本陣の資料としては、平面図は弘化年間（一八四四～一八四八年）の「程ヶ谷宿御陣」と、文久三年（一八六三年）の「將軍上落座敷割の絵図」がある。立面のものとして、一八六八年頃の本陣の門前で外国人の写っている写真があるくらいである。

以上のような僅かな資料から、東海道倶楽部の地元メンバー・金子寿彦氏（建築家・現四百倶楽部の代表）が想像復元図（図一2）を再現

させた。この本陣の想像復元図は、保土ヶ谷の共有財産ということで、四百倶楽部に版權が寄贈されている。

この本陣の立面図は岩崎中学校の四〇周年記念誌や、岩崎小学校PTAの会報に昨年載せられ、朝日新聞横浜版（昨年六月十八日）にも取り上げられている。このように、立面図をもとにした模型の作成と常設展示は、地元の人達の大きな関心事となってきたっており、復元された本陣を用いてTシャツや絵はがきを作ることなどが、現在考えられている。

#### 四——宿場をキーにしたまちおこし

かつての保土ヶ谷宿は、現在の市域の三分の一ほどの地域における、経済、文化の中心地であった。

こうした保土ヶ谷宿の歴史性をどう現代に生かしていくか、他の宿場町と比較し考えてみたい。

#### ①——先進地との比較

古い町や宿場というところ、思い浮かんでくる地名は世界歴史会議を昨年十一月に開いた京都は別格として、妻籠、足助、奈良井宿などがある有名である。歴史的環境としての町並みを生かした

表一 3 先進旧宿場との比較

区分	特産物	まつり	町並み	文化活動	資料館
妻籠(長野県)	五平餅	文化文政風俗絵巻之行列 愛宕山の火祭り	重要伝統的建造物保存地区	妻籠を愛する会	南木曾町宮奥谷郷土館
奈良井( // )	五平餅	宿場・漆器祭	同上	奈良井宿保存委員会	榎川村歴史民俗資料館
足助(愛知県)	竹製品 花台・飾台	足助祭(春・夏・秋)	保存対策調査地区	足助の町並みを守る会	三州足助屋敷
関(三重県)	和菓子	関宿街道まつり	重要伝統的建造物保存地区		歴史民俗資料館
保土ヶ谷	※宿場そば ※宿場人形	※保土ヶ谷宿まつり	※町並み整備 ガイド・プラン	保土ヶ谷宿 400 倶楽部	※宿場博物館

(※印は保土ヶ谷宿 400 倶楽部で研究中のもの)

表一 4 神奈川県内の旧宿場の比較

区分	宿場以外の機能	現在の自治体	特産物・まつり	宿場展示博物館
川崎	川崎大師の門前町 多摩川の渡し	川崎市	くず餅	川崎市民ミュージアム (63年秋オープン予定)
藤沢	門前町	藤沢市		※藤沢古文書館
平塚		平塚市	七夕まつり	平塚市博物館
大磯		大磯町		大磯郷土資料館
小田原	城下町	小田原市	かまぼこ 提ちん 北条まつり	小田原城天守閣
箱根	関所	箱根町	箱根細工 大名行列	箱根関所資料館

(※宿場常設展示はなし)

- ① 残すに値する町並みがある。
  - ② その地域ならではの祭りや特産物がある。
  - ③ 歴史を学べる博物館(資料館)がある。
- まらづくりを進めている、それらの先進事例をみてみると、その特徴を四点上げることができ(表一3参照)。

- ④ 保存・修復に当たって、住民・行政の熱意と努力が積み重ねられている。
- つまり歴史的環境を保全し、祭りや特産物を次代に伝えていくにあたり、住民や行政がともに郷土の共有財産を大切にすると熱意がホットに感じられるのである。

さて、このような条件を保土ヶ谷に適用してみるとどうだろうか。残すべき町並みは全くなし、特筆すべき産物や祭りもない。しかし、例えば江戸時代に生まれ、大正時代に廃止された神戸市(ゴウトイチ)は、相当地にぎわいがあったと伝えられている。また、宿場関係の古文書が大量に残され、横浜市史第一巻(昭和三十三年)、保土ヶ谷郷土史(昭和十三年)に活用されている。つまり現在では埋没しているが、掘り起こしの努力次第では、再度照明をあてて復元していくことが可能な歴史的素材が数多くありそうなのである。

### ② 県内旧宿場の様子

県内の各宿場をみると、宿場資料を展示した常設展示は、藤沢を除いてすべて設置されている。祭りや特産品もある(表一4)。

ところが、品川から三番目の宿場であった保土ヶ谷宿の地域は、明治以降、大正、昭和にかけて時代とともに帷子川沿いに工場が進出し、

中心的な役割を失なってきた。また、江戸時代からの祭りや産物を継承して、新しい時代の変化に対応しうるものをクリエイトすることもできずに現在に至っている。

岐阜県では中部未来博<sup>88</sup>のプレ・イベントとして岐阜県内の旧宿場を集めて中山道連合をつくり、シンポジウムや中山道六九次サミットを開催している。

また一九八六年秋には、旧「国名」を名称としている北は青森県「陸奥」から南は鹿児島県「薩摩」、「大隅」まで全国の三五の市や町が集まって全国伝統地名(旧国名)市町村連絡協議会が結成され、ガイドブックの作成や物産展を行った。

江戸時代には品川宿から箱根宿を含めた一〇ヶ宿組合があり、宿場相互の助け合いがあったと伝えられているが、今後神奈川県内の旧宿場とも相互に交流を図っていくことが望まれる。

### 五——未来につながる宿場おこし

保土ヶ谷宿の固有の歴史や伝統を埋もれさせずに、今一度掘り起こしをする目的で作られたのが四百俱樂部である。

そこで、四百俱樂部で現在考えられていることや活動のメニューを次に紹介したい(図-3

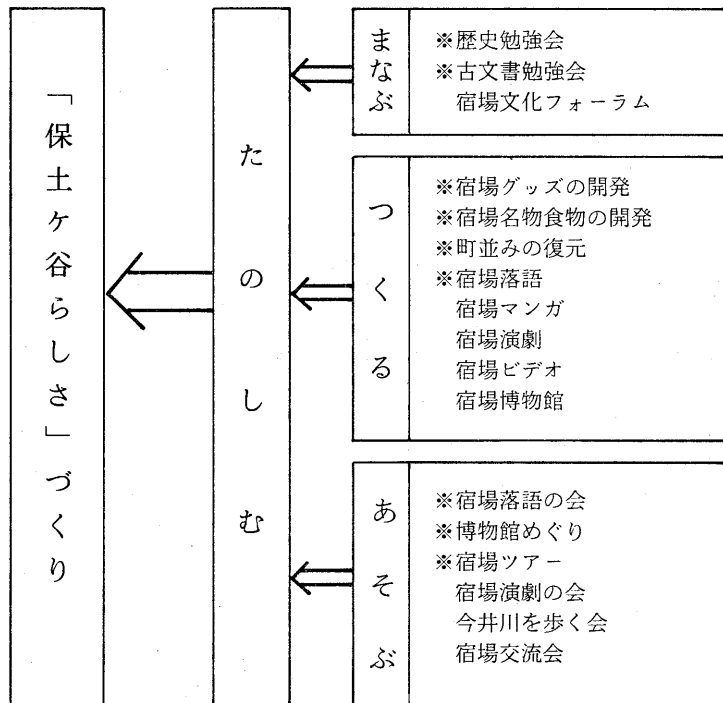
参照)。

#### ① イベントづくり

四百俱樂部は、保土ヶ谷に新しいドラマを作り、ほどがやストーリーを多様に展開していくことを考えている。そのイベントの一つとして、本年五月に地元のお寺の本堂を借りて、宿場落語の会を開く準備を進めている。この宿場落語は、オリジナルでギャホルン馬(本陣図を再生させた金子さんのペンネーム)創作なるものである。演目は「政子の井戸」「北向地蔵」「紀州の殿様」の三つである。市役所落語研究会にお願いし、近々リハールを公開で開くことになっている。また県内各宿場の交流をかねた宿場文化フォーラムの開催も検討している。

前述の通り保土ヶ谷宿の誕生は一六〇一年で、二〇〇一年には四〇〇周年を迎える。しかし、江戸時代に幕府直轄地で江戸の行楽コース

図-3 ぐらんど・でざいん「ほどがや・るねっさんす」



※印は保土ヶ谷宿 400 俱樂部で現在手掛けているもの。

であった横浜は、今も東京圏のベットタウンである。巨大化、画一化が進む東京のブランドである横浜においても、多様化、分衆化した人々が定住化しつつあり、こうした人々から新しい文化活動が生まれ、「横浜らしさ」「保土ヶ谷らしさ」がクリエイトされていくことが想定できる。

東海道の宿場であった市内のまち、神奈川、

戸塚とも協力しながら、地域の市民の自発的なまちおこし、創意工夫あるイベントづくりを期待したい。

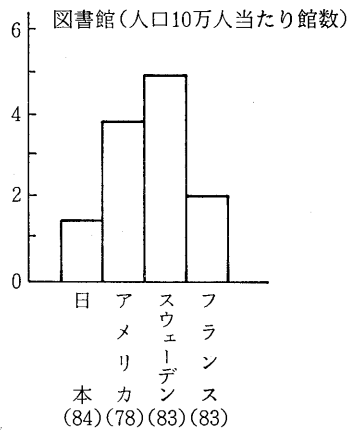
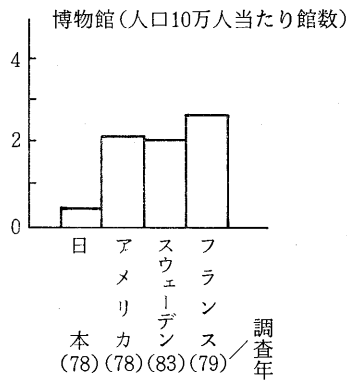
## ② 宿場博物館づくり

江戸時代以来の地域文化の遺産が希薄な横浜で、保土ヶ谷宿という歴史性は大切な資源ともいえるのである。そこで、継続して文化活動を支援する施設が存在が不可欠である。

博物館や図書館の各国の比較は図-4のとおりである。保土ヶ谷区の人口は一八万人で、アメリカ並に考えてみると、図書館は四つ、博物館は二つあってもおかしくないのである。

そこで保土ヶ谷の貴重な歴史性を常設展示する場として、周辺の町並みにも好印象をあえる宿場博物館が考えられる。この宿場博物館のなかに古文書、浮世絵などとともに、本陣や

図-4 欧米先進国より遅れている生活関連社会資本整備



62年版国民生活白書P.136

## ③ 地域に根ざした活動と運営 ⑦ がやがや会

宿場の町並みの模型を展示する。建物を和風に仕上げ、日本庭園とセットしている事例としては、品川区や足立区の博物館などがあり、江東区の深川江戸資料館のようにホールを芝居小屋風にすることも考えられる。しかし、保土ヶ谷区の代表的な建築物としては、本陣風に設計を施し、この建物を日本庭園の中に配置すれば、外国人ツーリストにも喜ばれるものになるだろう。

すなわち「それぞれの地域の文化施設、文化活動をネットワークしたシステムをつくりだしていかなければならない。すなわち文化施設を核として、それを全市域に及ぼしていく町づくりである。」(「都市空間の文化」川添登)

毎月第三水曜日に各分科会の情報交換や会報の内容、会の運営について検討している。運営委員会では堅いので、がやがや会と呼ぶことにしている。会員に商店の人も多いので、会の開始時間は夜七時からとなっている。

## ④ 歴史勉強会

毎回二〇人近くの参加者があり、最も人気の高い分科会になっている。東海道倶楽部作成の「保土ヶ谷宿とまちづくり」の冊子をテキストに、保土ヶ谷町の地元有志の方の事務所をお借りして、毎月第一水曜日夜七時から開いている。

## ⑤ 古文書勉強会

専門的な知識が必要であるので参加者は限られているが、古文書の専門家にも参加していたっているため、本格的な古文書の分析が始まっている。将来区史を作る時の基礎作業になると思われる。会場は地元有志の方の家をお借りしている。

## ⑥ 宿場名物食物の開発

今年八月の保土ヶ谷祭りに出展する予定で、地元のそば屋さん、寿司屋さん、菓子屋さんを中心に準備が進められている。昔あったものを再生し、現代風に作り変えることで、新しい保土ヶ谷名物食物を作ることになっており、四月に試食会を盛大に開くことになっている。

## ⑦ 宿場グッズの開発

本陣の想像復現図をモチーフにしたTシャツ、あるいは粘土で飛脚の人形を作るなど、いろいろとアイデアを出しているというところになっている。八月の保土ヶ谷祭りに出店する準備を進めている。

#### ②町並み探偵団

元治元年の町並み復元としては、平面レベルができていますので、本陣中心に両側二〇〇メートル程度まで連続立面図を作り、八月の保土ヶ

谷祭りに展示しようということになっている。

これにあわせて、町並みが残っているところまで出かけていく「宿場ツアー」や近くの博物館を見に行く「博物館めぐり」を予定している。

東京大学の西村助教によると、イギリスでは草の根のまちづくりとしてローカルアメリナイ・ソサエティーが盛んに活動しているとのことである。

しかし、四百倶楽部はまだ生まれて間もない会である。歴史の勉強会から発展して、活動を始めたばかりの会ではあるが、これからも地域の文化創造、文化研究に励み、活動を通して得られたものは地域に生かし、「ほどがや・ルネッサンス」としての宿場文化を再生・継承していく活動を続けていきたいと思う。

△保土ヶ谷宿四百倶楽部▽